

唐丹の歴史いろいろ(十)

大船渡市吉浜

木村正継



詮議・処刑

歌詞：
 城下真ん中 芭蕉の辻で
 七日晒して 大摺り引きよ
 其の日如何なる 大悪日よ
 頃は霜月 三日の事よ
 お節様をば 牢屋を出し
 罪の次第を 細かにかいて
 城下内なる 十八丁を
 屋敷町々 残らず晒し
 城下はずれの 七北表
 式丁四方に 垣結い廻し
 槍の穂先は 氷の如く
 左手右手より突き通されて
 隣れなるかや喜右工門お節

是非も泣く泣く 冥途へ消える
 是を見る人 聞く人々は
 天命なれども 憐れな事よ
 口におおもく 念仏唱え
 憐れ不憫の 因果の声は

お節喜右工門 形見ぞ残る
 是はさて置き 女川屋敷
 知行半地を 召上げられて
 家の妻子も散りじりなるよ
 今度御上の 御恵施の吟味
 御家柄とて 一族なれば
 捨てて置かれぬ 御家とありて
 二拾五貫の 半身代で
 御家柄とて 建て下されて
 君の恵みは 有り難や
 これで長い歌詞が終わります。

敷跡や菩提寺の洞岩山江林
 寺を訪問しました。
 飯田能登道親と先祖代々の墓、喜右衛門の墓、七回忌に許されて記帳された過去帳を見せて頂き時空を越えてその場に立ち会うような感慨を覚えました。
 最後の唄い手と言われた千石恒雄さんのテープや昔から伝えられた歌詞集の古文書コピーも譲って頂きました。

伊達のお姫様の駆け落ち事件 お節・喜右衛門悲恋の道行き(三)

あとがき

谷にひびきて四方に聞こゆ
 詮議役人 見届けなして
 仕置き終れば 屋敷へ帰る
 その後
 されば器量よき奥様なれば
 牢の内にて 観音経の
 数の文字を 糸にて縫うて
 二人未来の 菩提の為と
 今に残りし 七北表
 草の庵の 念仏堂に

私達三人は、この物語を追って各地を訪問しましたが、そのことを詳しく書くこととすると、一冊の本になつてしまうかもしれません。
 平成元年に事件の発生地宮城県桃生郡女川村(後に合併して、橋浦村、その後十三浜村と合併して現在の北上町になっています)屋

その後、現ご住職様の紹介で志津川町戸倉に星家を訪問し、掛け軸に作られた歌詞を見せて頂くことも出来ました。
 「昭和三十二年四月に書家の星榮三郎氏が、女川泉沢の千石恒雄氏(最後の歌い手とも言われている)所蔵のものより浄書し、平成元年6月に木村正継が転写させていただき歌詞集を作成」

私達の調査の課程で、牢の中で針を使えなかったの葉で刺繍したと伝えられる仏像「松葉の曼茶羅(まんだら)」を所蔵している仙台の善導寺では、「松葉の曼茶羅」を投げ込んだと言われる間魔堂の木像を修復して本堂に安置、パンフレットを作成して「松葉の曼茶羅」とともに紹介するようになりまし。

この事件に関する資料は多数残されています。
 一九九四年、西田耕三編宮城地域史学文庫冊「女川飯田口説」考には、後に掲載した資料の内容もまとめて紹介されています。
 この年お節・喜右衛門・飯田能登道親等関係者の二四二回忌の法要も菩提寺である洞岩山江林寺で営まれました。
 その前日には、地元北上町や各地の関係者を初め大船渡や川井村からも関係者がたくさん集まって盛大な交流会も持たれました。
 また、仙台市泉区七北田の刑場跡にお節地蔵が建てられており、毎年六月十九日に大勢の人達が集まって